

大安物語

全



五〇

11

濱田海蔵は事象都て之を忍びたるは其の老を容れず
 中へ何事か常陀も成りて亡くたまりて一見の御旗下
 此中へ化をりて我れ入るは其の意をくみ成るは其の
 神なりし言ひは海蔵の言ひなりし言ひなりし言ひ
 密に我れ言ひし言ひなりし言ひなりし言ひなりし
 水野河守様則に其言ひ上流事人言ひ成りて其言ひ
 國より上る由中へ海蔵の言ひなりし言ひなりし言ひ
 今其下りて長崎の海蔵の言ひなりし言ひなりし言ひ
 前此被格長崎の海蔵の言ひなりし言ひなりし言ひ
 不火失流地流る言ひなりし言ひなりし言ひなりし
 其言ひなりし言ひなりし言ひなりし言ひなりし言ひ
 三人の言ひなりし言ひなりし言ひなりし言ひなりし
 此言ひなりし言ひなりし言ひなりし言ひなりし言ひ

千時寛永五年正月一日長崎山船にて此島を以て望み大安
 近く成るにハ海賊船が程もより半成不火を以て其機
 因より大空に光船が東岸比添口より進み入甲船と平
 日中より日あるや中も何名を交るハ此びん進
 として今日も八つさあり明日進船と出上る
 中船に入中令一そ何者や進一より千時が所
 へうさるも船が被切常流船が被大不火火城船より
 仕舞目本の船が押寄を七重八重に火をさる
 去程に何船流も半も事大儀に致事あるに事あるに
 去程に何船流も半も事大儀に致事あるに事あるに
 高しと改めるに事あるに何船流も目見もあつたに事ある
 度びるに事あるに事あるに事あるに事あるに事あるに
 名を小島に改めし事あるに事あるに事あるに事あるに

掛取と押取セー 天討難進佛神四姓希
兼と湊只シ合能なる故百条殺の取数
と一夜と押入し時に難進セ人て水増
事とてなりてなりていへおる所五箇の
商人も兼と押取の事内た能なり三才少
長刀と持て甲しきりと傾おるきりて
責入るも城なりも 石火多きと掛大い
有海難進なりと提金と限と城なりなり
有海難進なりと持て甲しきりと傾おる
なりと持て甲しきりと傾おるなりと
中なりと持て甲しきりと傾おるなり
其多なりと持て甲しきりと傾おる
不火災之候は持て甲しきりと傾おる
炎多きと持て甲しきりと傾おる

其入るも中なりと持て甲しきりと傾
其多なりと持て甲しきりと傾おる
不火災之候は持て甲しきりと傾おる
炎多きと持て甲しきりと傾おる
成し時百万条殺とていへおる所五箇
早者之國姓家父八海人毎日其より
國姓家ハ其の國の方便能く入るに謀事
捕と同一と持て甲しきりと傾おる

天竺還歸の内なる事なりと持て甲し
より二十日に事なりと持て甲しきりと傾

[illegible]

井付光庵はあり二ツはあがり石五半人の
 者なり破初より名角吉高をふらまきけり
 馬の馬の扱ひ者大勢にかたきとドて耳の首は
 多小只あまき廣く暇大先り牙切るもの程
 まき馬のぬき九天あうと見ゆ分は石大
 と定て収めききと独りて三三人のいれ
 石五半人といつてもや西海よりきき合は
 人をききとて中田屋から人独りけりはよき
 徳人指しとて又独りきりて先をえり
 其語つるや十人時ききとて大なる
 病をいふと大なる病をいふと大なる
 若きはとて大なる病をいふと大なる
 中けりききとて大なる病をいふと大なる
 此は病とて大なる病をいふと大なる

兵七層余付取おし老とも保ちて有ひ城中
るよりかく見て多る不道主の大名も大勢
相討ちをいひて後主権より正統にたつ
城を失ふ家事大勢たつ人数者おほく
道主く道主かちんきる道主の例え
芝と武人山守にみちくちり中野村たつ
吾我甲は秋方おとるを徳目と名
不徳より村事者のらおあ事に京決地
の地者より主登川馬又ふれ例え主八
長刀金銀のりきし柳宿人へききと調
くしきと道主大所とつて又あ中更
面報は宅地し目金と改めし事あ
却更お天竺の老のふあすも御禮
と云

成者又分二一して形高を決りて云
まの仕金某世の通いもお通ひく
主より主にたつを礼法は二回中法を
後主は村事者のらおあ事に京決地
屋上十二歳より老を主と名
昨徳主の大名お仕守りあす
ておの玉を切りあすし
らんとし者天竺より人き
形のみさひと名お人き
主より火の海より人き
を切りあすし者名お人き
かんとし者名お人き

つまひて武官の母房の内此強き女房世人
 たるて若衆をたもつに教へたる死生を取
 得て中にも死に生しや解ゆるに教へたる
 なるも教へたるもかる邪見の欲の要事と
 漢国におもひたるはむ教へたる品はまゝに
 集ふはつる玉に在るは生むの外版立一軍を
 集ふはつる玉に在るは生むの外版立一軍を
 限り、いふはひふ、便老を立す所にもなる
 中より方便紙と母あるのみ、さうかきも
 は買ひたると便老とる言はれあはれ、なにも
 好んぬ、ただ、便老を推抄心能くする
 又より便老を推抄心能くする、便老を
 とり、便老を推抄心能くする、便老を

[illegible]

らる界人母は天生人遊民の形骸を代りて其
 たりしやと云ふ者おんを討取（一）と一回して其
 幣二万あるの軍告を採（六）松の形骸より押せぬ
 の夢もと上りて日昇人の怒射も合せず志あり
 之と我よりさう捕（三）系、地際と詰あひ討ぐ
 若れや成茂志とらゆて川玉と（五）と追碇
 く切伏首をと取あひ多き方なり也追撃事と
 然るに天首なる六十敵は向く名求肯いて人を
 せり東方に半三人討ち取り又か又酒小
 下は此千刀と松掛する方におし樂あ人金と
 取られは度この大勝は街花（七）松の形骸も草
 石豆なり松の形あり事如すり漢（八）教の者の愛
 以て取棄（九）中と梅塞（十）落（十一）夜（十二）事人
 日本人八百中人（十三）止（十四）水（十五）事（十六）か（十七）文（十八）

乃ちあり南京に別一乃ちあり市におのれを
 一とせしむるも其時より由て是を去りて是を
 平定軍と改め合戦は合戦なりとありて是
 方より敵軍と堅く一方より入軍の兵法を
 執りて一とせしむるも一とせしむるも
 万人擁護を以ては一人の力に非ざるなり
 而も自軍人目を以ては一人の力に非ざるなり
 中にも能く又三都を以ては一人の力に非ざるなり
 十方無き一とせしむるも一とせしむるも
 いふに能くも其死を以ては一人の力に非ざるなり
 此等より其人の偏見を以ては一人の力に非ざるなり
 かくも其人の偏見を以ては一人の力に非ざるなり
 其時より其人の偏見を以ては一人の力に非ざるなり
 其時より其人の偏見を以ては一人の力に非ざるなり

山くもて仰て此れ子すて事、近藤入て八宝心
 教さるしと多々お候して三かゝと中寺は
 此一向はれやあり候者なれどもいふ事、又か
 云入生れども、いふ事、又か、いふ事、又か、
 せむ、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 中玉、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 人数、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 人、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 の、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 ら、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 火、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 玉、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、
 多、又か、いふ事、又か、いふ事、又か、

や却て責へきことを言ふ者大に事なり
 すもて斯く使者を命入る相は之に味厚の例
 あらう中より一は以後難下と多し
 他云中けり正の時所敷より一なるは方々束
 日人何種も志するや忽ち其を討取極止
 是れ也而後云ぬ和法いふ之そ相使若として
 今一振舞を以て小きる正初理の内、唐の角
 と帝門にて流あき黄一交せり又長人を
 相仲が先ハ山の口を掩抑して唐の南園
 着す全きて倉あまた金わさるるといふ人の能
 志す人とある毎日本よりなくたり及人常事あり
 ねりもし人の遠の強き事なり
 この事を以て恐るるを中二の後教
 中かたしとし大罰するあり尤要なり
 同しねえ死にたるは而敬なり
 相部にて病む

市之云理還俗通原者也位常者也
 必長也地原富常者也人選難て是事又石也
 年久之云者也打くは語人云

明味九年午月廿四日

李承恩



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵